

氏 名	木 村 直 子
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	第 4922 号
学位授与年月日	平成 18 年 9 月 29 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	「子どものウェルビーイング」に関する実証的研究 —中学生を対象とした調査を用いて—
論文審査委員	主 査 教 授 畠 中 宗 一 副 査 教 授 白 澤 政 和 副 査 教 授 山 縣 文 治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中学生を対象にした「子どものウェルビーイング」に関する実証的研究である。具体的には、子どもを主体に子どもの健康や幸せを捉えなおし、子どもの安全と健康の問題の本質と解決の方向性を探索することを目的に、「子どものウェルビーイング」尺度作成に関する研究、一般家庭で暮らす「子どものウェルビーイング」に関する研究、児童養護施設で暮らす「子どものウェルビーイング」に関する研究、そして一般家庭と児童養護施設で暮らす子どもの比較に関する研究等の結果を踏まえ、「子どものウェルビーイング」を実現していくためのインプリケーションを含めた提言を行ったものである。

論文は、全体が七章から構成される。第一章で、研究の概要が、第二章で、「子どものウェルビーイング」尺度作成に関する研究が、第三章・第四章で、一般家庭で暮らす「子どものウェルビーイング」に関する研究が、第五章・第六章で、児童養護施設で暮らす「子どものウェルビーイング」に関する研究が、第七章で要約と総括および第三章から第六章までの知見に関する総合的考察が、それぞれ行われている。

主要な知見は、以下の四点である。第一の知見は、「子どもの中に家族の情緒的関係性が肯定的に内面化されていることが、『子どものウェルビーイング』の実現につながる。また、家族の情緒的関係性は、親の生活や自分のおかれている状況から子どもが想定した家族中心の生活の中で子どもの中に生まれ、また子どもの中に家族との情緒的な関係性が肯定的に内面化されている時、家族生活の充実が『子どものウェルビーイング』を高める」である。第二の知見は、「3歳以下の年齢の時に身近で世話をしてくれる存在との間の情緒的な関係性を肯定的に内面化していることが、『子どものウェルビーイング』につながる」である。第三の知見は、「児童養護施設に3歳以下で入所した子どもたちにとっては、『子どものウェルビーイング』を規定する要因は、職員との情緒的関係性を肯定的に内面化していることであり、10歳以上で入所した子どもたちにとっては、家族との情緒的関係性を肯定的に内面化していることが『子どものウェルビーイング』を規定している。一方、『子どものウェルビーイング』という一時点での状態ではなく、その後の『自立』の基盤となる『他者と信頼関係を築く』という意味での『情緒的自立』の確立という視点に立てば、3歳以下で入所した子どもたちにとっては、家族との情緒的な関係性を内面化することが規定要因になり、10歳以上の子どもたちにとっては、施設の職員との情緒的な関係性が規定要因となっている」である。第四の知見は、「児童養護施設の子どもたちの方が一般家庭の子どもたちよりも、家族の情緒的関係性を肯定的に内面しているにもかかわらず、『子どものウェルビーイング』得点は低い」である。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の特徴は、以下の三点に要約することができる。すなわち、第一に、「子どものウェルビーイング」に

関する広領域の先行研究のレビューを行い、その比較検討を通して、独自の構成概念を設定し、その尺度化を試みたことである。第二に、その尺度を従属変数に設定し、親のライフスタイル、家族生活の充実、家族との情緒関係、施設職員との情緒関係、情緒的自立などを独立変数に設定して、複数の重要な仮説を検証したことである。とりわけ家族社会学や家族関係学の分野における情緒に関する研究が低迷するなかで、「子どものウェルビーイング」にとって家族の情緒関係の重要性を改めてデータで実証したことの意義は大きい。第三に、メイアーの対人関係の発達仮説を実証し、現実の家族政策を考えていく際のインパクトのあるデータを構築できたことであり、このことは高く評価される。

本論文は、演繹法に依拠した仮説実証型の形式を取りながら、家族の情緒関係がキーであることや処遇年齢で「子どものウェルビーイング」を規定する要因が異なることなど獲得された知見のオリジナリティ及びその知見を臨床と政策の統合という文脈で行われた総合的な考察は示唆的である。すなわち、「子どものウェルビーイング」を家庭の中で実現するには、家族生活の各場面において、子どもたちがどのように期待し、考えているのかを把握する必要があること、そして子どもたちが期待し想定している家族生活と、親のライフスタイルを折り合わせるものが求められていること。「子どものウェルビーイング」という視点で考えた場合、3歳以下の子どもを育てる者には、子どもの中に関係性を肯定的に内面化できるような関わりを行う責任が生じること。児童養護施設への入所が必要な子どもたちの処遇について、「家族」からの分離ではなく、「家族」という形式にこだわる必要があり、育ての「家族」、里親家族、家庭的養護の重要性とその可能性を考え直す必要があるということ、「家族」が「家族」として機能できるように「家族」全体を育てる支援が「子どものウェルビーイング」を実現する「家族」への支援であること、加えて政策主体の自立の捉え方の歴史的な非一貫性や現行の政策への変更における科学的根拠の曖昧さなどの指摘は、今後の政策論争に刺激的なデータを提供していると思料される。

以上のことから、審査委員会は、本論文が、博士（学術）の学位に値するものと認めた。